

道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山 淳平

挿絵 柳田 補

発行所 社会思想社



南予にでかけたのはそれから十日後である。

宇和海を望む大久保山までは、山のむこうにまた山が連なっている。昔、伊予松山と南予の都市は主に海運で結ばれていたが、鉄道が開通し、いまは山を国道もはしっている。

嘉禎二年（一二三六）、鎌倉幕府は南予の中心地の宇和郡を時の太政大臣の西

園寺公経きんつねに与えている。西園寺じきじきに四国の西端の現地におもむき、幕府へこの地を所望したのである。

奈良・平安の昔から、西海・南海の両道に通じる宇和海は交通の要衝であった。貿易で富を築いた西園寺は、瀬戸内海から大宰府、そして遠く宋へと通じる海運の拠点としてこの地を重要視していた。

当然、西園寺は河野水軍の力を借りることになる。

河野家は所領の接することになった太政大臣に接近し、政治的な地盤を固めようとした。当時、河野家の器量人だった一遍智真みちひろの父の通広は、西園寺実氏との親交に心を配った。

河野の所領の西南部の山中に、内子という町がある。

いまこの町には、聖戒しょうかいが開基二祖といわれる時宗の願成寺がある。一遍智真は三十三の歳、参籠していた信州の善光寺で写し取った「二河白道図」を郷里へ持ち帰り内子の願成寺に籠もった。その後、開悟の場所を求め、西へ西へと西園寺所領の野山を歩き、ついに大久保山へ入ったのだ、と万作は推理しているのだった。

八幡浜から南へ向かう山道を上がると、やがて真下に宇和海がひらけてくる。いりくんだ湾内の鏡のような海面に真珠養殖のいかだが浮かんでいる。視界のはてまで初夏の海がひろがっていく。

槇子は大久保山の登り口にある山寺の山門の前で車をとめた。

めざす山寺は、山門からはずっと遠く、丘峻な岩壁の麓にある。寺に至る参道はナラやイチイガシの森の中だ。万作と槇子はハルゼミの声に迎えられ境内の奥深くへ入って行った。

この山寺は地元では福楽寺と呼ばれている。

宇和島領寺院帳には、「昔は大窪山と号し村上天皇の勅願所であった。開山は元高盛城主大窪晴美である。大窪晴美は一夜観音夢告を受け出家し大窪山に七堂伽藍を建立、念仏往生を遂げた」旨の記載がある。

万作はすでに十数年前、かつての西園寺領内の寺社仏閣をつぶさに調査し、

この大久保山の岩窟の一隅こそ一遍智真が、「青苔せいたいりよくら緑羅の幽地をうちほらい、松門柴戸の閑室をかまへ」（聖絵）た処ではなかったかという説をたてた。智真は眼下に広がる海を一望する岩頭に座し、はるか遠くの西方浄土を思念しながら、ついに南無阿弥陀仏の名号そのものになった。智真の口から、弥陀の国もこの世も同じものであるという「十一不二頌」じゅういちふにじゆの悟りが言葉になって湧きだしてきた。そしてこの「十一不二頌」は、一遍教学の根本原理となって今日に至っている。

万作は福楽寺へなん度も足を運び、最初のころは住職と、その後は独りで、そそり立つ岩頭をおおぎみながら奇岩のあちこちにぼっかりのぞく岩窟を探索してまわった。しかしながら、この時かれの説を裏付けるものは、何一つ発見することができなかったのである。

二人は庫裏へまわり、玄関から奥へ声をかけた。

二度三度、声は奥の間に届いたようだが、なんの応答もない。

玄関を出て木戸を押し、庭へはいる。濃い緑陰のせいなのか庭の角で待つ槇子の顔が青白い。万作はぬれ縁から半開きになった障子の奥の座敷をのぞく。すぐ、うすい布団とそこからはみでた痩せた男の脚が見えた。住職はぐっすり寝入っていた。

万作がためらっていると、槇子がやってきて、「よしましよ、休んでいらっしやるのに」と万作を制した。

二人は境内へもどり、質素な堂宇の裏手の小道を岩山のほうへ下っていった。溪流に架かる丸太橋を渡る。チリリ、チリリとせせらぎに交じって、ミソサザイのさえずりが聞こえる。

目的の場所に槇子を案内し、「一遍さんはたぶんここへ小屋がけて……」と万作がふりかえったとき、槇子のすぐ背後から青い閃光が走った。万作の一瞬の表情をとらえて、槇子も一直線に翔ぶ光を目で追う。と、閃光は溪流の一点に静止し、淡青な炎になって輝いている。カワセミだった。二人はそっと腰をおろし、ピクピク尾羽根を動かす溪流の翡翠かわせみを見つめた。

静かだった。

「生きて居て相遇う僧や一遍忌」

仏門俳句で名を成した名僧河野静雲の句を万作は呟いていた。

周辺の景観が気に入ったのか、抱いた膝小僧にかかるくあごをのせ、槇子はしばらく静謐なときを味わっているようだった。

「生きて居て……、すごい表現だわ」

槇子は静雲の句のことをいった。肩が微かにふるえている。

「一遍きりの人生ですから、何年かぶりにここへ来て、ふと自然にそんな句が思い浮かぶ。妙なものです」

「ここはきつと先生の成道地なんですね」

「いやいや、僕は成道などとは無縁ですが、あなたにそんなことをいわれると照れくさい限りです」

と万作はかるく受け流し、槇子の強い視線から目をそらした。

カワセミが直線になつて翔び去った。

それから二人は黙つて座っていた。

溪谷の風が槇子のうなじの後れ毛をゆらしている。

万作は槇子の目じりがうっすら涙にぬれているのを知ったが、気づかないふりをしていた。

帰りの参道でのことである。

大きなトチノキの下で、槇子は不意に動かなくなった。しやがみこみじつと掌をあわせているのである。見ると、太い幹のそばに小さな石の祠ほこいがあった。

中に水子地藏が一体、木の精のような眼差しで槇子を見つめている。彼女が何を祈っているのか、万作にも察しがついた。ややあつて万作が手を差しだすと、彼女はその手にすがるように立ち上がってきた。

松山へ帰る道すがら、万作は槇子に誘われて彼女の工房へ立ち寄った。

工房は二棟のプレハブで、みかん畑の中である。手前が展示室で奥が作業場、銀色のガラス窯は北側にしつらえてある。

槇子は木の棚に並べられた花器や食器、床においてある壺の中から自分のお気に入りの作品を紹介した。万作はそのひとつひとつに感心した。彼女の手のひらに乗せられた陶器は、万作の目にはみんな美しく見えた。

展示室の応接椅子にむかいあつて腰をかける。槇子がコーヒーを淹れる。風がみかんの花の匂いを運んでくる。

「お疲れさまでした」

槇子は古くからの友人をいたわるような眼差しで万作を見、それから時間をかけて二人はゆっくりコーヒーを飲んだ。

「わたし、動けなくなつて、ご迷惑をおかけしました」

と槇子は大久保山でのことを詫びた。

「迷惑なんかじゃありませんよ」

「でも、びっくりなさつたでしょ？」

「だれだって、つらいことがあります。ぼくだって泣き虫です」

「あら、それ、お酒の時ですよ」

と槿子はかるくかわし、クスツと肩で笑う。

それから彼女は陶芸のことで、少し身の上話をした。

離婚後、すぐに松山へ帰るのがいやで、知人を頼って神奈川の窯元で暮らしていた。土を練っているときだけ、彼女は別れた男を赦すことができたのだという。話を聞きながら万作も土を練ってみたいと思った。

道後まで送ってくれた槿子をかど庵に誘うと、喜んでついてきた。

倉田はあの日からいつもかど庵におり、外泊もしなくなっていた。この日も、万作が槿子をつれて茶房を覗くと、かれは奥のテーブルで地元紙の夕刊に目を落としていた。

槿子を見て、倉田はおつと声をあげ立ち上がった。

初対面のあいさつがすみ、三人はテーブルをかこんだ。

大久保山のことは槿子も万作も話さなかった。夏のシンポジウムのことをあれこれと話題にした。するといつの間にか静江も二階から下りてきて、三人の話に加わるのだった。

なごやかな雰囲気につられ、万作が槿子から陶芸を習うことにした、と明かすと、倉田は自分も一緒に習いたいがどんなやろ、と槿子の反応をうかがう。すかさず、静江があんたの三日坊主につきあわされるのはもうこりごりですからね、と亭主の横腹をつついた。なんやこそばいがな、と倉田は妻の手を思わずつかみ、その手をもてあますと、

「よい、こりや新婚以来やなあ」

と静江の手を放しながら高笑いした。

静江は倉田の肩をたわむれにたたき、うつむいてみせた。万作にとって、仲のいい倉田夫妻の姿は久しぶりだった。そして、この時がその最後になった。